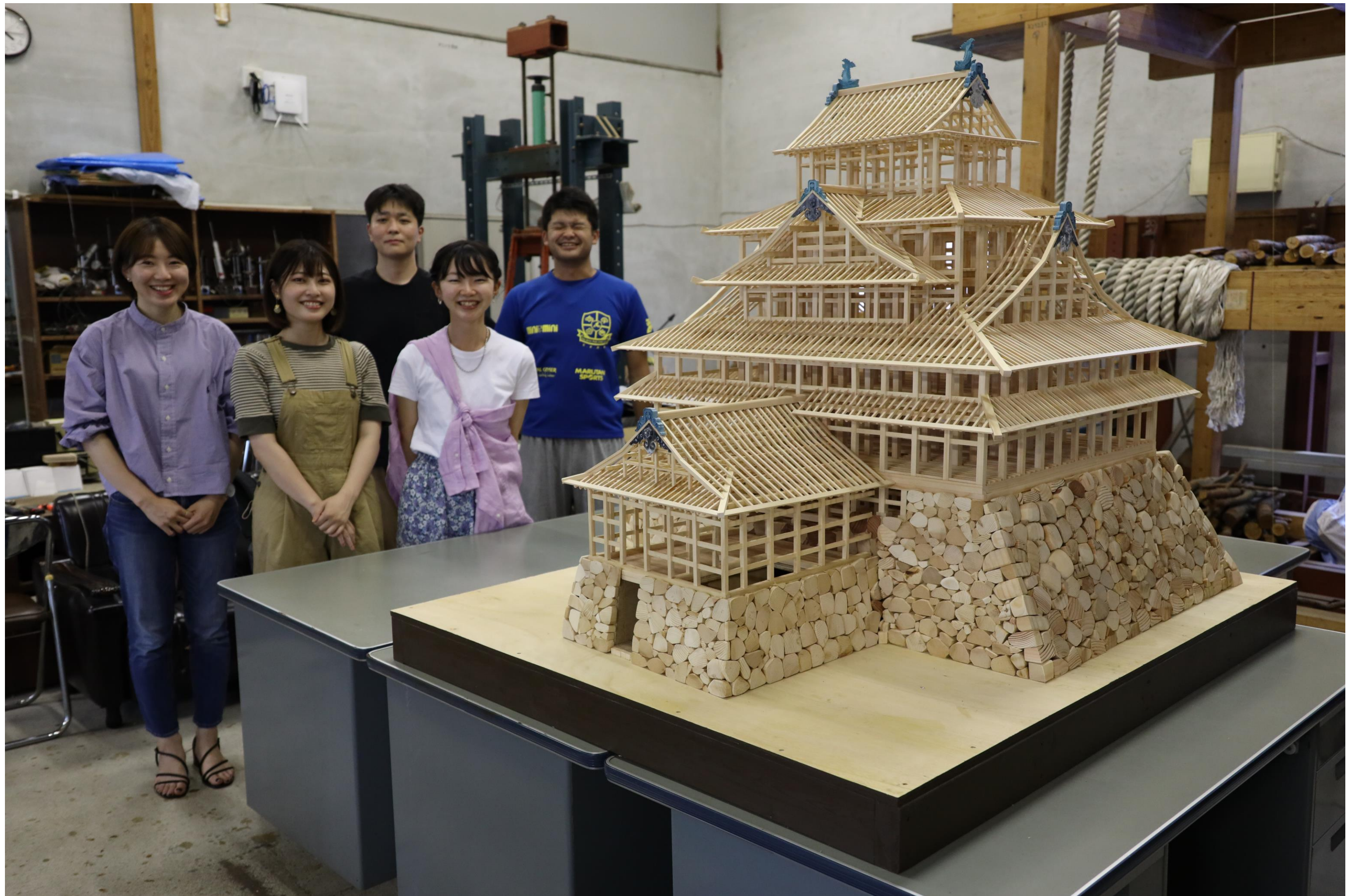






●松江城の歴史

松江城と城下町は、慶長 5 年、西暦 1600 年、関ヶ原の合戦での功績により、出雲・隠岐 2 国の領主となった堀尾氏によって築かれた。遠江国浜松城主 堀江忠氏が、出雲・隠岐 2 国を拝領し、父である堀尾吉晴とともに、この地方の中心であった現在の安来市広瀬町月山富田城に入り、新しい城地を求めて出雲国内を回るが、城地選定の最中、忠氏が急逝したため、吉晴は幼少の 2 代目藩主忠晴の後見となり、忠氏の意見を尊重し、子の亀田山に新城 松江城の築城を決意し、松江城の築城と城下町の建設に手腕を振るった。松江城の築城は、慶長 12 年、1607 年から慶長 16 年、1611 年まで足かけ 5 年の歳月をかけて行われたとされ、堀尾吉晴はその功績から松江開府の祖と呼ばれている。その後、忠晴には世継ぎがなく松江藩堀尾家は 2 代で断絶、後をうけた若狭國小浜城主の京極中高もわずか 4 年で後継ぎがないまま亡くなった。代わって寛永 15 年、1638 年に徳川家康の孫にあたる信濃国松本城主松平直政が新たに城主となり、以降、親藩松平家が明治新政府による廃藩置県まで、10 代 234 年間にわたって松江藩主を務めた。そのうち、第 7 代治郷は破綻した藩財政を立て直すと共に、江戸時代を代表する大名茶人として不昧の号を持ち、現在に至る松江の茶文化の基礎を築いた名君として知られている。

明治維新の後、もはや無用となった城郭建物は次々取り壊され、松江城も入札によって払い下げが決まるが、天守だけは守りたいとする旧松江藩主高城権八や豪農勝部本右衛門ら地元有志の尽力によって取り壊しを免れた。昭和 10 年、松江城は国宝保存法により国宝に指定され、昭和 25 年文化財保護法の施行により重要文化財となった。同年 6 月からは、5 年の歳月をかけて全面解体修理工事が行われ、現在に残る松江城の形が整った。そして、平成 27 年 7 月 8 日、国宝再指定を目指して取り組まれてきた学術調査が実を結び、近世城郭建築として 5 件目の国宝に指定された。

●建物概要

松江城は標高 29 メートルの亀田山に造られた平山城で、東西約 400m、南北 700m の敷地をもち、最上階の本丸に天守と六つの櫓が、一段下った二之丸には御広間や御所院、櫓などがあった。平成 13 年にこのうちの二之丸の太鼓櫓、中櫓、南櫓の 3 つの櫓が復元され、また現在、島根県庁がある三之丸には、藩主が住み、また政務を執った御殿があった。

松江城天守は外観 4 重、内部は地下 1 階を含む 5 階の造りで、天守台を含めた高さは約 30m、現在残っているお城の中で、平面規模は姫路城に次いで 2 番目であり、別名千鳥城の名で呼ばれている。天守構造は、正面に附櫓を配し、2 階建ての櫓の上に 3 階建ての望楼を載せた複合式望楼型で、外壁は下見黒板張りで黒を基調とした荘重雄大な造りとなっている。最上部、四重目の屋根を飾る鯨は木芯銅板張りで、高さ 2m8cm あり、現存 12 天守では最大のものである。屋根の隅々にある鬼瓦は角のない特異なものとして知られている。石垣で囲まれた空間は、通称穴蔵の間と呼ばれ、長期戦や籠城に備えて塩や米などの食糧を蓄えるとともに、食料水を確保するために井戸が掘られている。また、慶弔 16 年という天守の完成時期を確定させるものとして、天守とともに国宝に附指定された 2 枚の祈禱札は、この地階の 2 本の柱に打ち付けられていたことが明らかになった。各階をつなぐ階段の多くは、軽くて防火・防虫性に優れた桐の木で作られており、一説には籠城の際に上に引き上げて、敵の侵入を防ぐための工夫だと言われている。また、城内のいたるところに鉄砲狭間と矢狭間があり、二階と附櫓には石落しが設けられており実践的な造りになっている。三階正面中央には寺院様式の飾り窓である火灯窓であり、美観上の大きなアクセントになっている。

松江城天守に使われているのは主に松材であるが、柱は最大でも 2 階分を貫くものしかなく、また柱のまわりに板を張って、鎚や鉄輪で留めたものも多く見られる。これは包板と呼ばれ、総数 308 本の柱のうち 130 本に施されている。松江城は、こうして比較的短く細い部材を巧みに配置することによって大規模な城郭建築を可能にしている点が構造上の大きな特色で、後の城郭建築に大きな影響をあたえたと考えられている。四階を経て最上階は天狗の間と呼ばれている。

*注この模型は生物資源学部・木質資源工学研究室の学生(中村亮一・小野田いおり・阪本有理・齊藤勇人・岡田美久雲・峠のどか・中野陽菜・桃田航成)が約 1 年をかけて 1/30 スケールで制作した。